

☆☆☆

特集◎大学図書館の現在

☆☆☆

# 大学図書館における資料保存

——戦略的資料保存試論——

小島浩之

## ◆はじめに

東京大学経済学部図書館は、主として一般書籍を収集する図書館、各種統計資料、白書、報告書および近現代の一次資料を収集する資料室、前近代の一次資料を収集する文書室から成り立っている。蔵書総数は約73万点である。

経済学部図書館では、近年、所蔵資料の劣化が目立ってきた。なかでも資料室所管の近現代資料は、料紙・イメージ材料<sup>1)</sup>ともに劣化が進み、崩壊寸前のものすらある。そこで、資料室を中心に、近現代資料を中心とした保存・公開・修復・補修に関する研究と実践的活動を行い、その成果はWebサイトを通じて逐次公表している<sup>2)</sup>。本稿では、筆者が資料保存に取り組む際、根底に置いている考え方を一試論として提示してみたい。

## 1. プリザベーションとコンサーベーション

国際図書館連盟(IFLA)では1970年代から保存・修復の一般原則の策定に力を入れ、1979年には「図書館における保護と修復の原則」が公にされた。これはその後「図書館資料の保存と保護の原則」(1986年)、さらに「図書館資料の予防的保存対策の原則」(1998年)と、2度の改訂を経ている。日本語版のタイトルからわかるように、1979年版では保護と修復が中心になっているが、1986年版では修復が抜けて保存が加わり、最新版では保護が抜けて保存に重点がおかれているのである<sup>3)</sup>。

表1 プリザベーションとコンサーベーション

プリザベーション	図書館・文書館資料およびそれに含まれる情報を保存するための保管・設備の整備、職員の専門性、政策、技術、方法を含むすべての運営面、財政面の考慮。
コンサーベーション	図書館・文書館資料を劣化、損傷、消失から守るための個々の政策と実務で、技術系職員が考案した技術と方法を含む。

保存はプリザベーション(Preservation)、保護はコンサーベーション(Conservation)の訳語であり、1986年版では表1のように定義されている<sup>4)</sup>。

プリザベーションとコンサーベーションの日本での定着について、安江明夫氏を中心とする日本図書館協会資料保存委員会「資料管理チーム」のWebサイト<sup>5)</sup>は次のように述べる。

コンサーベーションについては、1990年代、木部徹さんや佐藤祐一さんが中心となった資料保存委員会の資料保存基礎技術WGの活躍などにより、日本でもその考えが明確になり、理解と実践が大きく前進してきた。これは高い評価に値する。しかし、プリザベーションについては、「利用のための資料保存」の方針とコンセプトは良かったが、それ以外では前進していない。

この中で日本においてプリザベーションの考え方が前進していないという指摘は正鵠を得ている。また、コンサーベーションの考え方や方法論が確立したという点も首肯できる。しかし、コンサーベーションへの理解となると、プリザベーションと同様に図書館界に普及しているとは言い難い。多くの図書館員が、「保存=修復」、「コンサーベーション=修復」<sup>6)</sup>という図式に縛られたままなのである<sup>7)</sup>。

## 2. 戦略と戦術

木部徹氏や安江明夫氏らの熱心な啓蒙活動にもかかわらず、プリザベーションやコンサーベーションへの理解が進まないのはなぜか。これにはさまざまな要因が考えられるが、私見では言葉の問題もその一つだと思われる。

日本語の保存、保護という言葉から表1の内容を想起することは難しい。プリザベーション、コンサーベーションがカタカナ表記のまま使用されることが多いのは、こういった事情が介在してい

るからだろう。ところが安易なカタカナ表記の多用は逆に両者の相違を不明確にしてしまった。この結果、IFLAで定義されてから20年近くたった現在でも、日本ではプリザベーション、コンサベーション、保存、保護の4語がうまく関連付けられず、一般的な理解へと結び付いていないのである。

これを裏付けるように、図書館情報学においては表2に掲げるように、Storage, Repository, Depositなども保存と訳されており、保存の意味が一定していない。

表2 保存と訳される用語<sup>9)</sup>

Storage collection	保存コレクション
Repository もしくは Storage area	保存書庫(保存庫)
Repository library	保存図書館
Deposit library	共同保存図書館

資料保存においては、プリザベーション(保存)に基づくコンサベーション(保護)の選択肢の一つとして、ストレージ、リポジトリ、ディポジットが存在すべきである<sup>9)</sup>。しかし、実際は表2に示したように、これらの訳語が一律に保存とされる場合が圧倒的なのである。

そこでいま、訳語の混乱を取り除き、プリザベーションとコンサベーションへの理解を深められるよう、前者を戦略、後者を戦術という言葉を使って説明を試みたい。

戦略(Strategy)、戦術(Tactics)は、本来軍事用語であるが経営戦略などの経営学の用語としても普及している。戦略と戦術の意味について『広辞苑』第5版は次のように記す。

表3 戦略と戦術

戦 略	戦術より広範な作成計画。各種の戦闘を総合し、戦争を全局的に運用する方法。(後略)
戦 術	戦闘実行上の方策。一個の戦闘における戦闘力の使用法。一般に戦略に従属。転じて、ある目的を達成するための方法。

ここから戦略とは長期的、大局的、原則的なもので、そこに意思決定や方向性の決定を含むものだということがわかる。これはまさにプリザベーションの意図する保存管理の意味に通ずるものがある。これに対し戦術は、戦略に基づく個々の具体策であり、保存に関する個々の政策というコンサベーションの定義と何ら矛盾しない。したがってプリザベーション・コンサベーションは戦略・戦術の語を用いて説明可能であることがわかるだ

ろう<sup>10)</sup>。

### 3. 戦略的資料保存

戦略・戦術といった言葉を管理科学の用語として本格的に位置づけたのは、アメリカの経営史学者チャンドラー(A.D.Chandler, Jr)である。彼は経営戦略を次のように定義している。

一企業体の基本的な長期目的を決定し、これらの諸目的を遂行するために必要な行動方式を選択し、諸資源を割当てること<sup>11)</sup>。

その後、多くの研究者がチャンドラーの定義を拡張したり、新たな経営戦略の定義付けをしたりしてきた。これら経営戦略の定義に共通するのは次の3点に集約される<sup>12)</sup>。

- ① 経営戦略とは環境対応パターンに関するものである。
- ② 経営戦略とは、企業の将来の方向に一定の指針を与える構想である。
- ③ 経営戦略とは、企業におけるさまざまな意思決定の指針の役割を果たす。

ここでの環境とは、景気などの経済環境、慣習などの社会環境、法や規制などの政治環境といった、組織に影響を及ぼす因子のことを言う。これらの因子に対してどのように対応し、資源を割り当て、組織を成長させるか指針を定めることが、組織における戦略すなわち経営戦略なのである。筆者はこの図式を組織的な資料保存にあてはめ、戦略的資料保存として次のように提案する。

- 【1】戦略的資料保存とは、長期的視点をもった資料保存の取り組みである。
- 【2】戦略的資料保存とは、資料劣化のさまざまなパターンを考慮したものである。
- 【3】戦略的資料保存とは、図書館の将来の方向性を見据えたものである。
- 【4】戦略的資料保存とは、行動の意思決定を伴った資料保存である。
- 【5】資料保存において、プリザベーションは戦略の、コンサベーションは戦術の範疇に入るべきものである。

【1】の「長期的視点」というのは、修復・補修といった対処療法だけでなく劣化させない環境づくりなど予防を意識することを指す。【2】は資料の劣化を媒体、イメージ材料、利用、環境など、資料を取り巻く複数の視点から考えるべきことを指す。これまで、資料の劣化といえば酸性紙問題

やビネガーシンドロームなど媒体自体の問題が注目を集めてきた。しかし資料は媒体とイメージ材料の複合体であり、利用や環境が大きく影響することを考えれば、媒体の劣化問題にのみ特化させることは危険だと言える。【3】の「将来の方向性」とは、「何を保存するのか」・「何ができるのか」・「どこまでできるのか」を組織の中で見つめ直す作業である。【4】の「行動の意思決定」とは【3】で決めた方向性に従い、状況に応じた判断を行うことを指す。例えば保存の可否のための場合分けや、保存の優先順位の確定などがこれに当たるだろう。

東京大学経済学部図書館では、日本経済に関わる希少な資料群を長期的に保存、公開してゆくことこそが最大の利用者サービスであると考えている。この方向性に沿って、資料に優先順位を付け、資料室所管の和資料が最も緊急度が高いと判断した。対象資料は学術的根拠に基づき状態調査を行い、劣化状況を数値により可視化した。さらに、対象範囲内に優先順位を付した上で場合分けを行い、個々の資料の状況に応じて対策を施した。これら戦略的資料保存の個別具体的な事例については、文末脚注2に示すWebページ所掲の論考をご覧ください。

#### ◆むすび

大学図書館は学術図書館であるがゆえに、各研究分野の基礎資料が何時でも保持されることを第一に求められている。つまり資料が保存され、いつでも提供できる状態にあることが、最大の利用者サービスだと言える。したがって大学図書館は資料保存に率先して取り組む必要がある。

その際、スタッフに必要なのは、自館の資料をよく知り、状況に応じて判断を下せる力である。図書館のスタッフは町医者、つまり資料のホームドクターになることを求められている。医師が検査や問診の結果から判断して適切な治療を行うように、状態調査や観察により、適切な保存措置の判断を下せねばならないのである。その上で軽度の場合は自ら手当し、重篤な症状であれば総合病院たる専門業者に送れば良い。修復の専門家は図書館外に多くいるが、資料のホームドクターとなり得るのは、モノに常時触れ得る図書館員だけなのである。

注

- 1) 墨、インクなどの記録材料(方法)のことを指す。
- 2) 公開URL: <http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/shiryo/hozon/top.html>
- 3) 竹内秀樹『「治す」から『防ぐ』へ—IFLA 図書館資料の予防的保存対策』(2002年12月20日開催 資料保存協議会セミナー・講演記録 <http://www.hozon.co.jp/cap/con-con/archives/takeuchi2.pdf>)
- 4) 資料保存研究会訳・編『IFLA 資料保存の原則』(日本図書館協会, 1987) p.10-11。なおプリザベーションとコンサベーションの定義付けについては、日本図書館協会資料保存委員会保存管理チームの「用語の定義」(<http://www.jla.or.jp/hozon/hozonkanri/teigi.pdf>)に要領よくまとめられている。
- 5) URL: <http://www.jla.or.jp/hozon/hozonkanri/about-hozonkanriteam.html>
- 6) コンサベーションと修復の相違については前掲注4「用語の定義」にまとめられている。このほか木部徹氏の「コンサベーションは『修復をしない』という選択肢を含む修復、もっといえば、『修復をどれだけ避けられるか』をまず考える修復である」(木部徹「コンサーバターを目指す人たちに: どう考え、なにを学ぶべきか」『ネットワーク資料保存』73, 2004)という説明が核心を突いている。
- 7) ここ数年、筆者は資料保存に関する講演や講習会の講師を数回つとめる機会があった。そこでの受講者の感想の中で際だって多かったのが、「保存=修復」ではないということや、修復とコンサベーションが同義ではないということに対する驚きであった。
- 8) Deposit Library 以外の出典は『図書館情報学用語辞典』第2版(丸善, 2002), 『ALA 図書館情報学辞典』(丸善, 1988)。Deposit Library については各種書籍、論文にその用例が多くある。
- 9) 天野絵里子・山田裕子・山本千恵『「資料保存課」訪問調査: University of Kentucky Libraries in USA』(『京都大学図書館機構報 静脩』44-1, 2007) ではケンタッキー州立大学における保存書庫を活用した資料保存について紹介している。これなどは、Repository (Storage area) がプリザベーションに基づくコンサベーションの一翼を担っている例であろう。
- 10) なおこれは戦術・戦略の語を用いて、プリザベーション、コンサベーションの理解を深めようとするものであって、両者の訳語としてこれらの語を使用すべきだと主張するものではない。
- 11) Chandler, A.D.Jr. [1962], Strategy and Structure, The MIT Press (日本語訳: 三菱経済研究所訳『経営戦略と組織』実業之日本社, 1967 p.29)
- 12) 岸川善光『経営戦略要論』同文館出版, 2006 p.9

(こじま ひろゆき:

東京大学大学院経済学研究科・経済学部資料室)  
[NDC9:014.6 BSH:1.資料保存 2.大学図書館]